

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

病害虫防除情報第 7 号

施設果菜・花き類の病害虫対策についてとりまとめましたのでお知らせします。
各地域の発生状況を把握しながら適切な防除指導をお願いします。

春の病害虫対策として、高湿度対策、病害虫密度低減対策を徹底しましょう。

- 1 作物名 施設果菜、花き類全般
- 2 病害虫名 施設で発生する病害全般
- 3 発生状況（要因、予測）

- 1) 2月の巡回調査における施設果菜類の病害の発生状況は、トマトとイチゴの灰色かび病でやや多い状況であった。その他についてはほぼ平年並みであるが、3～4月に降に多発する病害も多いことから注意が必要である。（図1～4）
- 2) 春先にかけてのこの時期は施設栽培において温湿度管理が最も難しい期間であり、特に今年は1月中旬の冷え込みの後、1月下旬から2月第3半旬にかけて3～4月並みの気温で推移したことで、適切な湿度管理が非常に難しく病原菌の感染が進んだ恐れが高い。（図5）
- 3) 今後1か月の気象予報でも、気温は高く、降水量も多い（日照時間は少ない）と予想されており、病原菌の増殖蔓延に好適な条件が見込まれる。

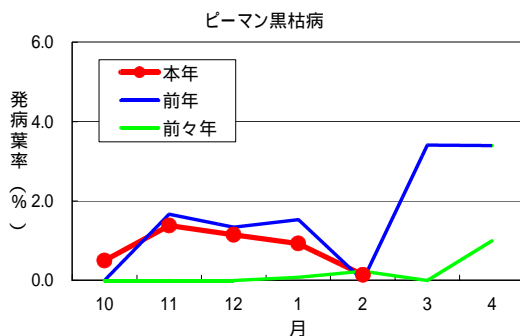


図 1 ピーマン黒枯病の発生推移

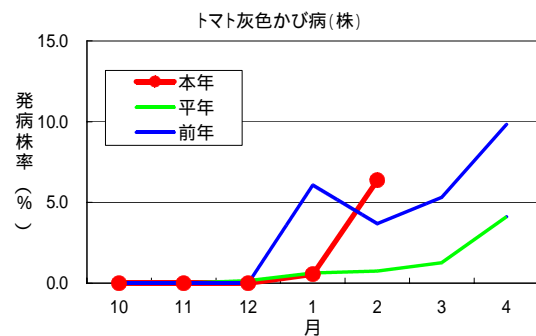


図 2 トマト灰色かび病の発生推移

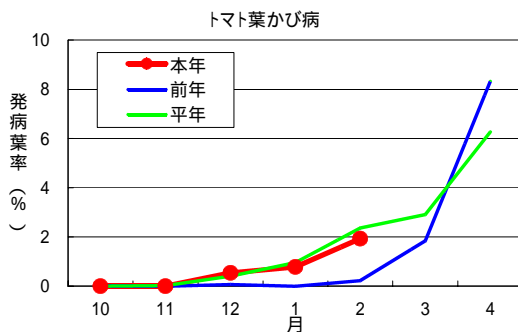


図 3 トマト葉かび病の発生推移

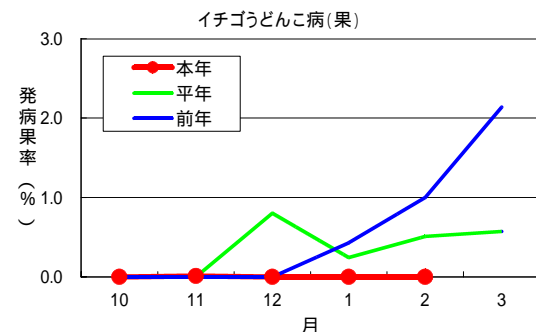


図 4 イチゴうどんこ病の発生推移

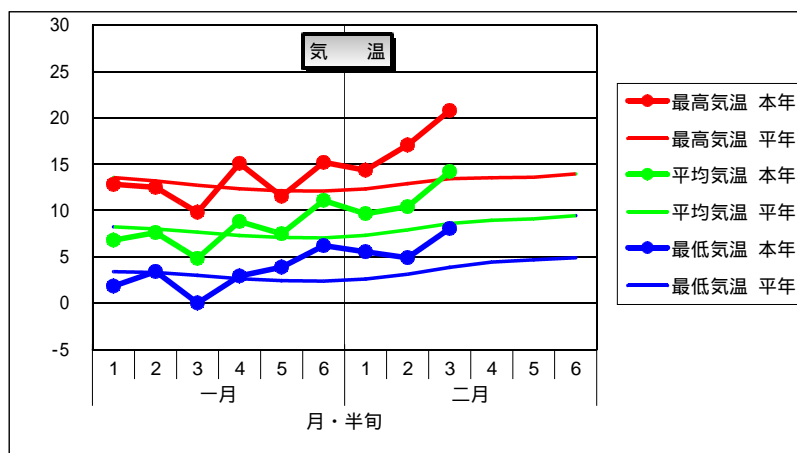


図5 1～2月の気温の推移

4 防除上の注意

1) 温湿度管理

多層被覆下では暖房機の稼働時間が少なくなり、施設内の空気が停滞する時間帯が長くなるため、循環扇を活用したり、暖房機の送風機能を積極的に利用するなどして湿度の低下（均一化）を図り、施設内環境の改善に努める。

高夜温により暖房機が稼働しない日は、暖房機の設定温度を上げたり、内張被覆を省略して暖房機を強制稼働させるなどの高湿度対策を行う。

週間天気予報などにより最低気温に注意し、、の適切な管理ができるよう努める。

2) 防除（共通項）

既に発生が見られる施設では、間隔を詰めた連続防除や丁寧な薬剤散布を行うなど、早急に徹底防除に努め、菌密度の低下を図る。

病原菌密度が高まり急激な蔓延が懸念される場合には、連続雨天時などの薬剤散布に不適な条件であっても、防除を実施する必要がある。

罹病葉やその他の感染部位等を切除し、施設外に持ち出す際にも、病原菌胞子の飛散や健全部への接触がないよう極力注意する。

3) 病害対策（各論）

キュウリつる枯病

例年に比べて「キュウリつる枯病」の発生が多く観察される。

罹病した株は病原菌が付着しているため、改植に当たっては伝染源とならないよう施設外に持ち出すなどして適切に処分する。初期病徴は不明瞭で、感染に気付くのが遅れがちになるため、予防に重点を置いた防除が肝心で、地際部や下位節への丁寧な薬剤散布も必要である。管理としては、高温多湿を避け、適切な肥培管理により草勢を保つことも重要である。

トマト、イチゴ灰色かび病

2月の調査時点でもトマトではやや多い発生となっている。

施設内湿度を高めないように注意し、予防を主体に防除することが基本であるが、感染が広がってしまった場合には、罹病葉や果実を持ち出した後に丁寧に薬剤を散布することが効果的である。

4) その他

害虫についても、気温の上昇とともに活動が活発化するため、多発生にならないよう害虫密度に注意し初期対策を徹底する。

詳細については、病虫害防除・肥料検査センター、総合農業試験場生物環境部、西臼杵支庁・各農林振興局（農業改良普及センター）等関係機関に照会するとともに、防除に当たっては農薬使用基準を遵守し、危被害防止に努める。

《連絡先》病虫害防除・肥料検査センター 米良
 TEL : 0985-73-6670 Fax : 0985-73-7499
 ホームページ : <http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>
 E-mail : byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp